
韓娥

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

韓蛾

【Nコード】

N1889F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

中国戦国時代。歌の名人韓蛾は宿を断られその悲しみを泣くと忽ちのうちに人々の心は。烈士にあるお話です。

第一章

韓蛾

中国戦国時代の話だ。

韓の国に韓蛾という女がいた。歌を歌ってそれを生業として生きており時折旅にも出た。旅賃は当然その歌で稼いで旅をしていた。

この時もそうであり東の齊の国に行っていた。彼女はふと齊のある城の門のところ座ると楽器を手に歌を歌い出した。するとそこに立ち止まらぬ者はいなかった。

「ほう、これは」

「いい歌だ」

声もその音感もよく誰の耳にも心地よく残る歌であった。皆その歌に聞き惚れ彼女の前に次々と金や食べ物差し出していった。とりわけ金を差し出す者が多く彼女の座っている前は銭で土が見えなくなってしまう程であった。

「いや、素晴らしい」

「これ程の歌は今まで聴いたことがない」

「全くだ」

口々にこう述べて金を置いていくのであった。皆彼女の歌に満足していた。

しかしこれで終わりではなかった。歌声の余韻は彼女が門から去った後も門や家の梁、棟木の辺りに残り三日間消えはしなかった。

殺風景な門がそれにより全く別の賑やかささえ感じさせられるものになってしまっていた。人々はこれを見てまた彼女が只者ではないことを悟るのだった。

「これが真の歌であるというのか」

「ただ美味いだけではない」

こう言い合い既に何処かへと去ってしまった彼女を懐かしむのであった。やがて彼女は齊の都にまで辿り着いた。ここでも歌い人々

の心を打った。しかしその彼女に思わぬ不幸が訪れることになった。宿に泊めてもらおうとしたその時だった。不幸にもこの時斉と韓は戦の最中であつた。彼女が韓の生まれだと知る宿屋の主が彼女を泊めようとしなかつたのだ。

「韓の国の人間は駄目だ」

「何故でございますか」

「理由は決まっています」

怒った声で彼女に対して答える。宿の前に立ち彼女を一步も入れようとはしない。

「今我が国と韓は戦をしているな」

「はい、それは」

このことは韓蛾も知っていた。旅をしている間に聞いているのだ。存じていますが」

「ならわかる筈だ」

怒った声でまた韓蛾に告げる。

「あんたを泊めない理由がな」

「お金ならありますが」

「お金の問題じゃない」

主も引かない。

「韓の人間は駄目なんだ。あんたが韓の人間だってことはわかっているんだ」

「それはそうですが」

「これでわかるな。だから駄目だ」

「どうしてもですか」

「そうだ、どうしてもだ」

またしても強い声で語るのだつた。

「わかつたら帰った還つた。いいな」

「そんな・・・」

韓蛾はこう言われて泣くばかりだった。だがその泣き声が自然と歌声になる。それは実に美しくそれと共にもの悲しい歌であつた。

その歌を聞いた人々は。誰もが立ち止まった。そして悲しみの中に落ち老いも若きも涙を流すのだった。流さずにはいられなかった。

「悲しい………」

「何という歌だ」

その歌は一度聴くと忘れられないものだった。皆涙を流し食事さえも喉が通らない。寝ても覚めても悲しみに心を支配され胸が張り裂けそうだった。いたたまれなくなった彼等はここで遂に動くのだった。動かなくてはもういてもたってもいられなかったのだ。

「これはかなわん」

「韓蛾だ」

自然と言い合うのだった。

「韓蛾を呼ぶんだ」

「まずは彼女に謝ろう」

「そうだ、まずはそれだ」

その悲しさの前に自分達の狭量さを恥ずかしく思ったのだ。そうしてその中で今彼女に謝罪することを決意するのだった。

すぐに彼女を探して呼び止めた。そのうえで頭を垂れる。

「すまなかった」

「わし等が悪かった」

まずはこう言って謝罪するのだった。

「韓の者だと言って」

「申し訳ないことをした」

「それでじゃ」

謝罪したうえでさらに言葉を続ける。

「宿もあるし」

「金もある」

この場合の金は謝罪のものである。

「そしてじゃ。歌ってくれんか」

「歌を」

こう韓蛾に頼み込むのであった。

「今のままではあまりにもの悲しくて」

「何も食えはしない」

「寝ても覚めても悲しい」

「だから。それで」

そしてまた彼女に乞う。

「何か楽しい歌を歌ってくれ」

「頼む」

「楽しい歌をですか」

それまで黙って話を聞いているだけだった韓蛾が歌と聞いてこの場ではじめて口を開いたのだ。普段はあまり話さない性分であるらしい。

「楽しい歌を歌って欲しいですね」

「そうじゃ。あんなことをして申し訳ないが」

「それでもじゃ」

「頼めるか？」

こう韓蛾に問うのであった。

「まあ駄目じゃったらいいが」

「あんなことを言ったわし等じゃからのう」

自然と視線が逸れてしまう。罪の意識がそうさせていた。

「けれど。よかったら」

「頼めるか」

「ええ」

だが大方の予想に反して韓蛾は。静かに頷くのであった。

第二章

「歌を歌えばいいんですよね」

「そうじゃが」

「いいのか？わし等に」

「歌わせてくれるのでしたら」

静かに微笑んで彼等に応えるのであった。

「是非共。私はそれだけでいいです」

「何と」

誰もが今の韓娥の言葉を聞いて驚きの声をあげた。

「歌えればそれでいいとな」

「何という志か」

顔を見合わせ驚くばかりであつた。

「邪険にしたわし等に対して」

「そこまでしてくるか」

「確かに悲しいものでした」

それは彼女も認めるのだった。

「けれど。歌わせてくれるのなら」

「左様か」

「それでは早速」

「はい、では」

韓娥は彼等の言葉を受け早速歌いだした。最初からいきなり明るい調子だった。

「おおっ」

「この歌はまた」

「明るい、明るいぞ」

皆彼女の歌を聴いて早速笑顔になるのだった。

「明るいだけではない、楽しいぞ」

「何か聴いているだけだな」

「うむ」

笑顔で顔を見合わせる。もういてもたってもいられなかった。

「踊るぞ」

「踊ろう」

言う側から踊りだした。その中央には韓蛾いる。町の誰もが笑顔になり韓蛾の周りで踊りはじめる。もう悲しい気持ちは何処にもなかった。

「さあさあ皆で」

「踊れ踊れ」

「踊りが終わった後は」

自然にその後の話になっていく。

「酒じゃ馳走じゃあ」

「韓蛾殿を祝おう」

「祝え祝え」

口々に韓蛾を讃えていく。

「宴を開いて皆楽しみ」

「心ゆくまで踊ろうぞ」

誰もが笑顔で歌い踊り宴を楽しんだ。そしてそれが終わった次の日には韓蛾に対して立派な贈り物をするのであった。

「やあやあ有り難う」

「おかげで明るくなった」

「明るくなっただけではない」

笑顔で韓蛾を囲んで言うのだった。

「楽しませてもらった」

「だからじゃ」

「無論あのことの謝罪もある」

宿屋のことであるのは言うまでもない。

「じゃが。それと共にだ」

「御礼ですか」

「いや、実に楽しい気分にさせてもらった」

「全くだ」

誰もが笑顔で彼女に語るのであった。

「その御礼じゃよ」

「さあ、受け取ってくれ」

「はあ。それでしたら」

彼等の申し出を素直に受け取ることにした。これでこの話は終わった。だがここで。街の者達はここであることを韓蛾に提案してき

た。

「それで一つ御願いがあ

るのですがな」

「御願いと

いますと」

「貴女の歌です」

韓蛾の歌について言うのだった。

「貴女の歌を。歌っていいか」

「これからもこの街で」

「私の歌をですか」

これは韓蛾にとっては意外なことだった。それで目を丸くさせて彼等に言葉を返すのだった。

「そう、この街でこれからも」

「歌っていいだろうか」

「悲しい歌も楽しい歌も」

両方の歌をであった。

「よいだろうか」

「貴女さえよかったら」

「それでしたら」

韓蛾はその言葉を聞いて静かに笑う。実に穏やかな笑みだった。

「喜んで」

「いいと申されるか」

「歌い手にとっては自分の歌が口ずさまれること程嬉しいことはありません」

その小さな声で述べた。やはり普段は物静かである。

「ですから。是非」

「ではこれから」

「歌わせてもらいます」

「どうぞ。そうして頂けることこそ私が一番嬉しいことですから」
「ではな」

「これから。歌わせてもらおう」

こうしてこの街では韓蛾の歌が歌われることになった。これは何時しか齊の国の隅から隅にまで広がり齊では歌が好かれるようになった。心の底から出されたものは人の心に残り続けるという。そしてそれは何時までも残る。韓蛾の話はそういう話である。

韓蛾 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1889f/>

韓蛾

2010年10月8日15時04分発行